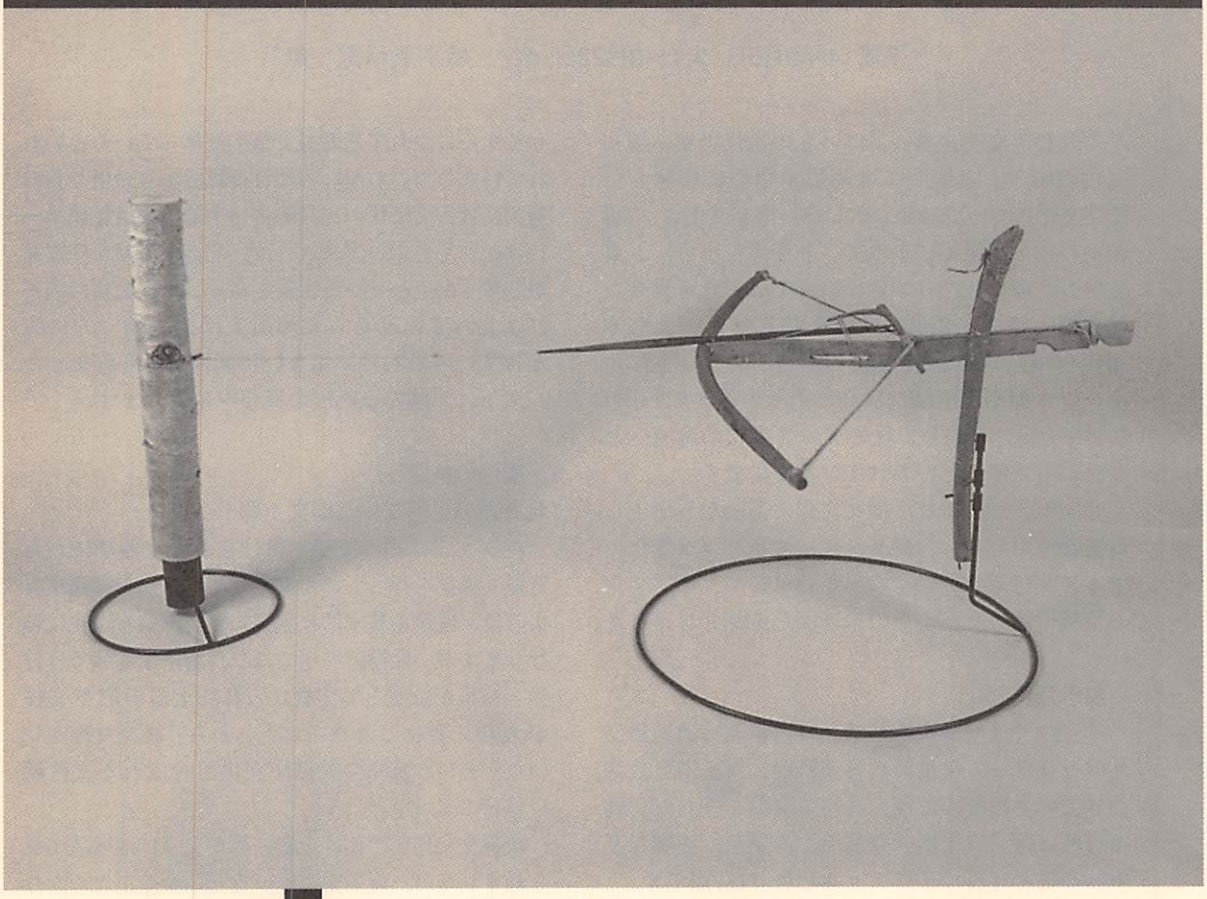
ISSN 0917−4729

北海道立北方民族博物館 Hokkaido Museum of Northern Peoples



E-269
仕掛け弓（北海道アイヌ）
長さ　86.5cm　高さ　50.0cm

北方民族博物館だより
−45号−

企画展	北の古代世界−擦文文化の頃−	2
講座	北の古代世界−擦文文化の頃−	4
講座	映像に見る北方の子育てと遊び／擦文文化とオホーツク文化	5
新着資料紹介	平成13年度の収集資料について	6
表紙・記事		7
ニュース		8

北の古代世界ー擦文文化の頃ー

平成14年2月5日（火）～3月22日（金）　特別展示室　無料

平成13年度の企画展では「北の古代世界ー擦文文化の頃ー」と題して北海道を中心に展開した擦文文化について紹介しました。擦文（さつもん）文化は、7世紀から12・13世紀にかけて、北海道を中心に、東北地方北部やサハリン南部にまで広がりを見せた文化で、続縄文文化の伝統を引き継ぎ、また本州の古墳時代や奈良時代の影響、および主にオホーツク海沿岸地域に展開したオホーツク文化の影響をも受けながら、後のアイヌ文化の源流へとつながってゆくといわれている文化です。

今回の企画展では、擦文文化の遺跡から出土した遺物を中心に、続縄文文化、オホーツク文化、アイヌ文化期の遺物や資料を展示して、擦文文化の特徴や他の文化からの影響などを紹介しました。

展示資料

本企画展は旭川市博物館、（財）北海道埋蔵文化財センター、常呂町教育委員会、女満別町教育委員会の各機関のご協力を得て実現しました。展示資料は擦文式土器、鉄製品、木製品、漆椀など実物資料と写真、イラストなど合計137点です。

旭川市博物館からは、旭川市の神居古潭遺跡や恵庭市内の遺跡などから出土した鉄製品、底面刻印土器（底部にXやYなどの記号がついた土器）、およびアイヌ文化期のシロシ付き漆椀（底部に⋏や山など、シロシと呼ばれる所有権を表す印がついた漆椀）などを借用しました。これらの資料により、擦文文化期には鉄製品が普及していたことや、後のアイヌ文化期に通じる要素がすでに存在した可能性があることを示すことができました。

（財）北海道埋蔵文化財センターからは、主に千歳市から出土した保存状態の良好な木製品を数多く借用することができました。擦文文化は遺物が少ないことで有名ですが、それはこのような有機質の素材を利用して生活用具を作っていたことと関係している可能性を示すことができました。

常呂町教育委員会や女満別町教育委員会からは主に擦文式土器を中心に借用しました。擦文文化は東北地方北部や北海道南部から始まって、時代が新しくなるにつれて北海道東部へと移っていくといわれていました。しかし各教育委員会からお借りした遺物には擦文時代の比較的古い土器（10世紀前半～11世紀前半）で、本来ならば、北海道南部や中央部から多く出土している土器もあり、擦文文化の広がりは北海道南部から北海道東部へと画一的に広がっていったわけではない可能性もみられました。

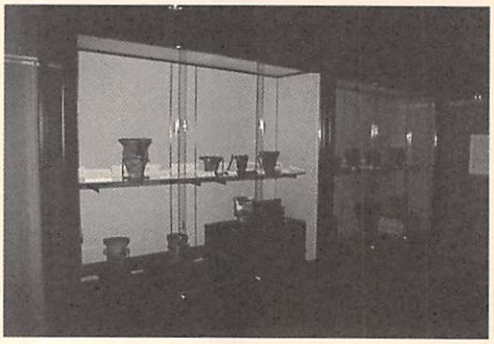
以下に今回の企画展の概要を紹介します。

展示の構成

北海道の土器文化と擦文土器

縄文文化は縄の文様が付けられた土器が使われ、狩猟・採集を行っていた文化です。本州では縄文文化の後、農耕を基本的な生業にすえた弥生文化に移行しますが、北海道を中心にした寒冷な地域では狩猟・採集が依然として続けられ、土器の形や文様が大きく変化しなかったことから「縄文文化が続いた」という意味で続縄文文化と呼ばれる文化期に移行します。

続縄文文化前半期は土器の形や文様に地域差が見られましたが、後半期にはいると地域差がなくなり同じような形、文様の土器が使われるようになります。その後本州から入ってきた鉄器を本格的に使う擦文文化が全道的に広がっていきます。



展示室の様子

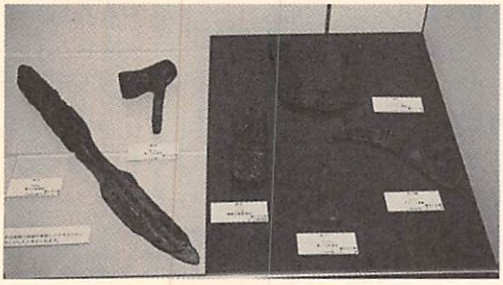
「擦文」の由来は、土器の文様に由来しています。擦文式土器にはそれまでの縄文式土器や続縄文式土器がより紐（ひも）で文様を付けていたのと異なり、木片によって文様がつけられ、また土器の全面を木のへらでこすって形を整えるという、本州の弥生式土

器および土師器の影響がみられます。この木の刷毛目のあとを擦痕と呼び、ここから、「擦文」という名前が生まれました。

生業

擦文文化では、川を遡上するサケ・マスを中心とした梁漁や刺突漁といった漁撈が生業の主要な位置を占めていましたが、仕掛け弓や回転式離頭銛などの存在から陸獣狩猟や海獣狩猟も行っていたことがわかります。

また、アワ、キビ、オオムギなどの雑穀農耕に鎌や鍬などの鉄製農具が使われていました。雑穀農耕は続縄文文化の頃から始まっていましたが、擦文文化になってより大規模に行われるようになりました。



鎌・鍬などの農耕具

住居

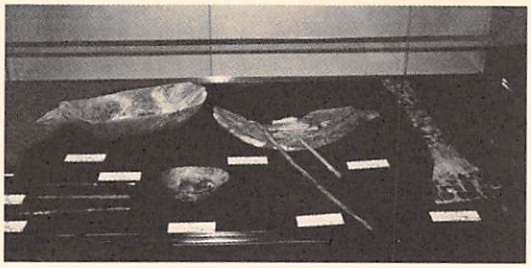
擦文文化の住居は半地下式で方形の竪穴住居です。住居はその多くが比較的大きな河川の河口近くや砂丘上、河川の支流が分れる場所に位置しています。

ところで、擦文人には「くぼみとして残る前代の住居址を再利用しない」という決まりがあったようです。縄文文化・続縄文文化・オホーツク文化の頃には、労力を惜しむためか積極的に以前使われた竪穴住居のくぼみを利用して住居を作っていることが多いのとは対照的です。

さまざまな木製品

水を多く含んだ土に木製品が埋まっている場合、腐ることなく何百年・何千年もの間、その原形に近い形を保っている場合があります。

近年、擦文文化やアイヌ文化を対象とした低湿地部分を含む大規模な発掘調査例が増加しており、道央部を中心に器や篦、箸など、多くの木製品が発見されています。



さまざまな木製品

交易

鉄製品には製品として本州から入ってきたものと、擦文人が鉄製品をリサイクルして製作したものがあります。

擦文文化では鉄製農具や刃物類など本格的に鉄器を利用しており、これらは北海道南部から中央部、北部、東部へと地域的、段階的に普及しました。こうした分布圏の拡大は、鉄などを得るために必要な交易品（主にサケ・マス、陸獣類、海獣類）の積極的な獲得と交易圏の拡大によってもたらされたと考えられています。

日本海沿岸の遺跡から発見された、底に刻印を持つ土器は交易集団の各グループを表す印とも考えられます。擦文文化のこの底面刻印土器は後のアイヌ文化の「シロシ」に非常によく似ています。

アイヌ文化へ

擦文文化は、12・13世紀頃になると土器や竪穴住居、カマドを作らなくなり、内耳式鉄鍋、平地式住居、炉を取り入れ、また交易品の数を増していく過程の中で新しい文化（アイヌ文化）を生み出したと考えられています。しかし、この擦文文化の終末時期については、未だはっきりしていません。擦文文化の終末年代を13世紀末と考える意見と、札幌・苫小牧低地帯ではそれが13世紀で、オホーツク海沿岸地域では16世紀後半あるいは場合によっては17世紀初頭と考える意見があります。

今回の企画展では、考古資料では比較的珍しい鉄製品や木製品を数多く展示することができました。

多くの情報と展示資料を提供いただいた、各機関に感謝申し上げます。

（学芸課　角　達之助）

講座　北の古代世界ー擦文文化の頃ー

講師　瀬川　拓郎氏（旭川市博物館学芸員）

田中　裕香氏（(財)北海道埋蔵文化財センター主任）

平成14年2月16日（土）13:30－16:30　当館講堂

企画展「北の古代世界ー擦文文化の頃ー」に関連してお二人の講師をお招きして講座を行いました。以下にその概要を報告します。

■「サケから解き明かす千年前の社会ー擦文時代の生業を考えるー」瀬川　拓郎氏（旭川市博物館学芸員）

上川地方の擦文時代の重要な生業として、サケの捕獲があげられる。旭川市の、石狩川沿いの扇状地には、擦文時代の集落跡とみられる錦町5遺跡という遺跡がある。その遺跡の住居址のカマドからはサケの骨が数多く出土し、付近からは、遡上してくるサケを一度に大量に捕獲する梁の遺構が検出された。まさに「サケづくし」の遺跡であった。

現在、上川盆地の川にサケは遡上しないが、江戸時代の文献に、上川盆地はサケが多いという記録があることからみても、当時はサケが大量に遡上していたことがわかる。上川盆地を流れる川のなかで、当時サケが遡上していた川は、本流の石狩川とその支流の忠別川だけであった。サケはわき水を目指して遡上するため、産卵場は石狩川か忠別川のわき水がある場所と考えられる。

ところで、上川盆地の擦文集落跡は、石狩川水系の、昔サケが遡上した川沿いの扇状地に位置し、さらにその地点はアイヌ語で「メム」と呼ばれる場所と一致する。この「メム」とはアイヌ語で「わき水がたまっていて魚がたくさん入って来る場所」という意味である。

このように、上川盆地の擦文時代の集落跡が、サケの遡上河川沿いの、産卵場付近に立地することから見て、当時の上川盆地の擦文人がサケの生態を熟知しており、またサケの捕獲を重要な生業として位置づけていたことがわかる。

■「カマドと石組炉ー擦文文化の西・東ー」
中田　裕香氏（(財)北海道埋蔵文化財センター主任）

擦文文化は北海道の全域で展開した文化であるが、どの地域においても一様な展開を見せたというわけではない。北海道中央部と北海道東部の擦文文化の遺跡だけを比較してみても、遺構や遺物に違いが見られる。

擦文文化の住居の構造を見てみると、一般的には住居の一角にカマドが設けられている。このカマドは煮炊き用として使用されたと考えられるが、擦文文化と同じ頃に北海道東部において展開したオホーツク文化ではカマドは見られず、住居の中央に石で囲まれた炉があり、煮炊きはここで行われていた。

このオホーツク文化の影響によるものか、北海道東部の擦文文化の住居には中央に炉をもつものも見受けられる。これはひとつの地域差と考えられる。

また、北海道中央部の擦文文化の遺跡からは坏と呼ばれる底の浅いボール状の土器がよく出土するが、北海道東部ではあまり見受けられない。この違いは、北海道中央部と東部では食習慣の違いや食に対する考え方の違いを表しているのかもしれない。

さらに、北海道中央部ではカマドの煙吹き出し口を、粘土などでわざと塞いでカマドを使えなくしている例がある。これは、その住居を使用していた当時の擦文人がその家を廃棄するときに施したとも考えられるが、このような例は北海道東部には見られない。むしろ東部のほうでは、焼失住居が比較的多いことから、家を廃棄するときは家に火を放つのかもしれない。

このように住居址の構造や、住居址から出土する遺物などを観察すると、一口に擦文文化といっても北海道中央部と東部ではいくつかの違いが見られ、その違いはそれぞれの地域に住んでいた擦文人たちの価値観の違いによるものかもしれない。

（学芸課　角　達之助）

映像で見る北方の子育てと遊び

講師　齋藤　玲子（当館学芸員）

平成14年2月9日（土）10:00-11:30　当館講堂

本講座では、アイヌとイヌイトの比較を中心に、北方先住民族の子育てについて、民族誌映像を上映しながら解説しました。子どもをとりまく文化には、身体の大きさや運動機能の違いにともなうことのみならず、子どもを「弱いもの」であるとともに「神聖な存在」と考えるゆえの、大人とは異なる精神的な要素が多くあります。食べる（→排泄する）、眠る、着る、遊ぶなど、子どもの生活の基本的な場面を選び、1920～30年代の古い映像から現代のものまで10作品の一部分と、イヌイトの少年が大人になるまでの物語：「アンゴテー」を全編上映しました。

北方の子育ては、「少なく産んで大事に育てる」傾向があり、個性を尊重したものでした。遊びや実践のなかで生活に必要な知識や技術を身につけていく彼らの子育ては、日本人が当たり前と思っているものと全く違う価値観もあれば、万国共通であると共感できる場面もあったと思います。参加者からは、「貴重な映像を見ることができ楽しかった」などの声が寄せられました。

＜上映した作品＞（制作・著作権者等略）

「白老村の生活」（アイヌ）1925年
「イヨマンデ」（アイヌ）1931年
「アイヌの装い」（アイヌ）1968年
「シリーズ（6）アイヌの四季と暮らし第4巻　～暮らす・伝える・守る～」
（アイヌ文化伝承記録映画ビデオ大全集）1996年
「オロッコ・ギリアークの生活」
（ウイルタ、ニブフ／樺太）1938年
「タイミールにて」（ヌガナサン）1963年
「我らヌガナサン」（ヌガナサン）1981年
「ナヌーク・オブ・ザ・ノース」
（イヌイト）1922年
「パロの結婚」（イヌイト）1933年
「アンゴテー：あるエスキモーの少年の物語」
（イヌイト）1953年
「カナダのネツリック・イヌイトのあそび・ゲーム」（イヌイト）1967、71年カナダ国立映画制作庁の作品より　当館第8回特別展のために編集

（学芸課　齋藤　玲子）

擦文文化とオホーツク文化

講師　角　達之助（当館学芸員）

平成14年2月23日（土）14:00-15:30　当館講堂

本講座では、企画展「北の古代世界ー擦文文化の頃ー」の展示解説とともに、オホーツク海沿岸を中心に展開したオホーツク文化についても紹介しました。以下にその概要を紹介します。

擦文文化（7世紀～12、13世紀）が東北地方北部から北海道全域にかけて徐々に領域を広げていったのに対して、オホーツク文化は主にオホーツク海沿岸に生活領域をもっていました。擦文文化では、数量は少ないものの土器、鉄器、木製品、骨角器などの遺物が見られ、特に鉄器と木製品の使用が一般的になっていたことが推測できます。これは交易による鉄の輸入量の増大と、その鉄を利用して木を加工することが容易になったことが原因と考えられます。また、遺物の種類が、農具、漁撈具、狩猟具などと多岐に渡っており、地域によってさまざまな生業を営んでいたことがわかります。

一方、オホーツク文化では、鉄器や木製品などの遺物よりも、骨角器が大量に出土するという傾向がみられます。この骨角器の材料にはヒグマやエゾシカなど陸獣の骨はもちろん、アザラシ類やトド、クジラ類など、オホーツク海沿岸で捕獲できる海棲哺乳類の骨も積極的に利用しており、これらは主に銛先などの海獣狩猟用具に加工されていました。オホーツク文化では、擦文文化に比べて海棲哺乳類や魚類の獲得が主な生業であったようです。

海岸部や内陸部双方に適応できた擦文文化の人びとは、しだいにオホーツク文化の人びとの領域にまで進出し、ついにはオホーツク文化を吸収するに至ります。10世紀頃は、擦文式土器とオホーツク式土器の中間的な土器であるトビニタイ式土器がオホーツク海沿岸地域で作られるようになり、それ以後北海道でオホーツク式土器は見られなくなっていきます。

擦文文化も12・13世紀頃になると、土器を作ることをやめ、鉄鍋や木製品により依存するようになり、後のアイヌ文化の原型を形作っていくようになると考えられます。

（学芸課　角　達之助）

平成13年度の収集資料について

平成13年度は、実物資料66件、映像資料7件を購入し、10件の資料寄贈を受けました。寄贈資料については、その都度本紙面に掲載してきましたので、本稿では割愛させていただきます。

民族／地域別の実物資料件数とおもな内訳は次のとおりです。

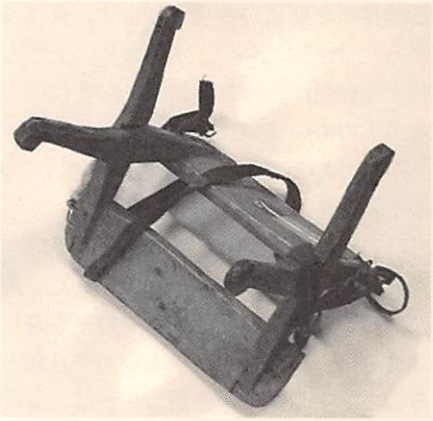
コリヤーク：衣類・袋物など　9件
エベン：橇（そり）模型など　3件
（以上、ロシア／カムチャツカ州）
ウデヘ：帽子など 4件（ロシア／沿海地方）
ツァータン：鞍、容器など　15件
ハルハ：ゲル、馬頭琴など　8件
（以上、モンゴル）
ブリヤート：衣類など　6件
（モンゴル、中国／内蒙古自治区）
北海道アイヌ：鉢巻、ござ、織機など　10件
サハリンアイヌ：衣類など　9件
（日本／北海道）
アサバスカインディアン：バッグ、ブーツ2件
（アメリカ合衆国／アラスカ州）

昨年度は、平成12年度に引き続いてカムチャツカ半島、そしてモンゴルを重点地域とし、民族資料の収集活動をおこないました。

カムチャツカ半島の民族資料としては、コリヤークのトナカイ毛皮製コートやハマニンニク（テンキ草）製の裁縫道具入れ、エベンのトナカイ橇模型、犬橇模型などを購入し、他に宮崎設計事務所に制作依頼していたコリヤークの1/10住居模型を収集しました。

トナカイ毛皮製冬用上衣／コリヤーク

また、昨年度はこれまで当館ではほとんど所蔵していなかったモンゴルの民族資料の収集を計画しました。そして、トナカイ騎乗用鞍やゆりかご、スキーなど、タイガで生活するツァータンの生活用具、移動式住居「ゲル」や家具類など、草原地帯の生活用具を含む多くの資料を購入することができました。



荷物・子ども兼用の鞍／ツァータン

さらに、平成13年度特別展「美しき北の文様」およびその関連事業で使用するために、北海道アイヌの刺繍見本や刺繍を施した鉢巻、手甲、コースター、ござ織機やござの見本などの制作を依頼し、当館収蔵資料として収集しました。

これらのほかに、現地調査をおこなっている研究者からの情報にもとづき、北方諸地域の民族資料を随時収集してきました。

映像資料としては、グラナダTV（イギリス）制作のドキュメンタリー「消え行く世界」のシリーズから、「モングーン・タイガの牧人たち」（トゥバ）、「ポンド・インレットのエスキモー」（イヌイト）、カナダ国立映画制作庁制作の1940～50年代の映像資料などを収集しました。

今年度もロシア・カムチャツカ州、モンゴルの民族資料を中心に、常設展示の入れ替えや強化のために必要な資料、特別展示に必要な資料、講座や講習会などの教育普及事業で説明や比較のために使用する資料などを収集していく予定です。

（学芸課　中田　篤）

今号の表紙 ― 仕掛け弓 ―

今号の表紙は「罠（わな）」。北海道アイヌが用いていた、自動的に矢を発射させる狩猟具である。この罠を獲物の通り道に仕掛けるのであるが、通り道には細い糸が張られ、その糸は仕掛け弓に結びつけられている。糸が張られた場所を通ろうとする動物がこの糸に触れると糸が引っ張られ、仕掛けがはずれて矢が発射される。矢尻にはトリカブトの毒が塗ってあるため、矢が動物の急所に命中しなくても狩猟者は毒が回って倒れた獲物を捕獲することができる。

この仕掛け弓は、主にキツネ、テン、カワウソなどの小動物を捕らえるために利用された。これら小動物の捕獲の目的は食用ではなく、その毛皮の獲得にあった。キツネ、テン、カワウソなどの毛皮は、18世紀から19世紀にかけてのアイヌにとって、漆器やガラス玉、鉄製品などを得るために必要な重要な交易品であった。

なおこの仕掛け弓は北海道アイヌだけではなく、サハリンや広くシベリア一帯にも類似品が認められているものである。

（『蝦夷島奇観』雄峰社　1982年より）

みんぞく　こうこ　はくぶつかん in　北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

1/15(火)　アイヌ民族の伝統的な住居・チセが静内町に現存していることを確認／D

1/19(土)　平取町内で収蔵、展示されているアイヌ民族の生活用具計1121点が「北海道二風谷及び周辺地域のアイヌ生活用具コレクション」として、国の重要有形民俗文化財に指定／AS

1/23(水)　国の指定史跡の松前城の保存整備事業で、「搦手二ノ門」に続く土塀の復元がほぼ完成し、築城当時の姿に近づく／Y

1/24(木)　（財）アイヌ文化振興・研究推進機構がアイヌ民族の工芸作家7人をスコットランド国立博物館へ派遣／D

2/17(日)　道内各地で受け継がれてきた神楽や古式舞踏などの伝統芸能を集めた舞台が札幌市の生涯学習センターで上演／AS

2/17(日)　1993年に空知川の河床で発見された約500万年前のセイウチの化石が滝川市美術自然史館で公開／Y

2/22(金)　訓子府町が旧役場庁舎を歴史資料館として整備することを決定／Y

2/25(月)　アメリカ在住の日本人作家が、アメリカ先住民族ナバホと北海道アイヌ民族の交流を計画／D

3/3(土)　網走市立郷土博物館で、アイヌ民族が身につけ、生活必需品でもあった小刀「マキリ」の特別展を開催／D

3/7(木)　アイヌ民族共有財産訴訟で、原告側全面敗訴／D(夕)

3/21(木)　アイヌ民族の伝統的生活空間（アイヌ語でイオル）の中核地を胆振管内白老町に設置することを決定／D

3/22(木)　アイヌ文化伝承の第一人者葛野辰次郎氏が死去／AS

※AS：朝日新聞、D：北海道新聞、Y：読売新聞、複数紙掲載の場合は扱いが大きい方を紹介しています。

News

■ 寄贈資料（1-3月）

・東京都の細井千聖氏から、ウデへの帽子、針山、靴各1点が寄贈されました。

■ 執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等（1-3月）

・伊藤務2002『民具図録ーアイヌの工芸世界ー』マキリミュージアム
・講談社2001『周縁から見た中世日本　日本の歴史14』
・篠崎紘一
　2001『持衰』郁朋社
　2001『日輪の神女』郁朋社
・出利葉浩司編著2001『民族学的情報伝達装置としての博物館の意義に関する基礎的研究（アイヌ文化展示を中心に）』文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書
・ユネスコ2001『世界遺産』
・岸上伸啓編著2001『先住民による海洋資源利用と管理　漁業権と管理をめぐる人類学的研究』文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書

■ 主な来館者（1-3月）

1/31(木)
　天理大学国際文化学部日本学科
　助教授　　藤田　明良氏
2/9（土）
　沖縄県糸満市長　ほか10名
　糸満市ふれあいのつばさ　25名
　北海道浅井学園大学生涯学習システム学部芸術メディア学科
　教授　　佐藤　軍治氏
　教授　　谷川　幸雄氏
2/11(月)
　武蔵野美術大学芸術文化学科
　教授　　今井　良朗氏
　教授　　楫　　義明氏

■ 行事案内（5・6月）

5/5(日･祝)　こども映写室
5/24(金)　講習会「とんぼ玉づくり」第１回
5/25(土)　博物館クラブ「親子でつくるとんぼ玉」
5/26(日)　講習会「とんぼ玉づくり」第2回
6/23(日)　講座「ウイルタの歴史と樺太時代の映像上映」

■その他の行事報告（1-3月）

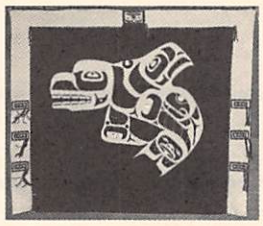
1/12（土）
　博物館クラブ
　「かんじきで歩こう」
1/29(火)-2/3(日)
　学芸員実習（北海道東海大学生3名）
2/27(水)
　平成13年度第3回資料収集評価委員会議

■職員の異動

退職（3月31日付）
　副館長　髙杉　敏雄
転出（4月1日付）
　管理課係長　上野　達夫
　（北海道農政部農政課主査へ）
転入（4月1日付）
　副館長　松本　繁
　（北海道教育庁上川教育局次長より）
　管理課係長　梅川　竜二
　（北海道教育庁檜山教育局企画総務課主査より）

展示替えをしました！

「オホーツク文化」をのぞく各コーナーで一部資料の入れ替えをしました。
また、よりわかりやすくするためにパネルの一部を改変し、さらに英文も加えました。
新しく登場した資料やパネルを是非ご覧ください。



■観覧者動向（1-3月）

	常設展示	企画展
1月	621	
2月	1,624	1,564
3月	2,006	1,665
計	4,251名	3,229名

■友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介下さい。詳しくはお問い合わせを。

【訂正】
博物館だより44号（友の会だより42号）の掲載記事に誤りがありましたので訂正します。大変失礼いたしました。
＜誤＞
４ページ２段目１８行目
「アイヌ独自の楽器である ことを裏付けている。・・・」
↓
＜正＞
「アイヌ独自の楽器でない ことを裏付けている。」

北方民族博物館だより
―第　45　号―
2002年4月26日発行

編集・発行　北海道立北方民族博物館
〒093-0042　北海道網走市字潮見309-1
TEL 0152-45-3888　FAX 0152-45-3889
e-mail:hoppohm@ohotuku26.or.jp
ホームページ:http://www.ohotuku26.or.jp/hoppohm/